令和５年度　第７６回　東京都立鷺宮高等学校卒業式　校長式辞

ただ今、本校所定の課程を修了し、卒業証書を手にした２７１名の皆さん、本校教職員を代表して、皆さんの卒業を心よりお祝いします。「卒業おめでとうございます。」

本日ここに、ご来賓並びに保護者の皆様のご臨席を賜り、東京都立鷺宮高等学校第７６回卒業式を挙行できますことに感謝申し上げるとともに、入学以来、本校の教育に寄せられました皆様の深いご理解と温かいご支援に対しまして、厚く御礼申し上げます。

さて、本日は、鷺宮高校を羽ばたいてゆく卒業生の皆さんに、「ケアしケアされ、生きていくこと」と「夢をもつこと」についてお話しします。

兵庫県立大学で社会福祉を研究されている竹端　寛（たけばた　ひろし）さんが書いた『ケアしケアされ、生きていく』という本を読みました。「ケア」は英語の「Care」、「気にかける、世話する」という意味の「ケア」です。竹端さんは、大学生など若い人たちと接する中で、次のようなことを感じているそうです。「最近の若い方を見ていると、社会の規格からはみ出してはいけないと、忖度したり、空気を読んだりしてしまう人が多いと感じる。でも、そんな社会は息苦しくて生きづらいのではないか…。自分のありのままを大切にする、『ケアのある社会』にしよう！」

この本の中にある印象的な記述を紹介します。

～どんな小さなことでも良いから、まず自分が「夢を持ち始める」。そして、そのことを、信用できそうな他者に伝えて、「夢を追い求める」サポートをしてもらう。それが、ケア的な関係性を築く上での土台になります。その際、じっくり話を聞くことなく、「そんなの無理だ」「やめておけ」など頭ごなしに査定や批判の眼差しを注ぐ人がいたら、それはハラスメント的な関係性なので、家族や友人、恋人であっても、そういう人とは「縁がなかった」と、勇気を持って縁を切る、遠ざかる方が良いです。そして、あなたの「夢」を否定せずに追い求めるのを応援してくれる人を、探し始めるのです。そのためには、あなたも他者の「夢」を否定せずに聞いてみることが大切かも知れません。あなたが他者の他者性を否定せずにその「夢」を聞くことができるなら、相手もあなたの「夢」を聞いてみたいでしょうし、それを否定はしないでしょう。そんな「夢」を語り合う仲間を増やしていくなかで、「共に思いやる」関係性が増えていきます。このような「共に思いやる」仲間を増やしていくなかで、あなたの自己否定や抑圧的な感情や価値観は少しずつほぐれ、「夢を生きる」準備ができてくるのです。～

竹端さんは、「ケア」を弱者のための特別な営みとは捉えていません。社会の抑圧や呪縛から抜け出して、自分のありのままを大切にするのが「ケア」だと捉えています。他者や自分に関心を向け、配慮し、「ケア」を受け取ったり提供したりする関係、共に思いやる関係を作っていくことが「ケアのある社会」だと考えます。そして、「ケアしケアされ、生きていく」時に欠かせないものが、「夢をもつこと」なのです。

皆さん、鷺宮高校での３年間を思い出してください。新型コロナウイルス感染症との闘いの中、学習や学校行事や部活動に多くの制約がありました。コロナ前と同じようには活動できないもどかしさや辛さがあったと思います。同時に、皆さんは、これまで当たり前にできていたことのありがたみや重要性も再認識したはずです。特に、「他者と一緒にいること」や、「一緒に何かをやることの大切さ」を痛感したと思います。

世界や日本のできごとにも目を転じてみてください。ウクライナやパレスチナの紛争は、解決の糸口が見えません。武力や暴力の残虐性に心が痛むとともに、平和を願う気持ちが増しているのではないでしょうか。また、能登半島地震が起き、自然災害の恐怖とともに、助け合いの大切さを感じているのではないでしょうか。

このように激しく社会が変化している最中、皆さんは多くのことを感じ、学んでいます。そこに共通する重要な精神は、「人のつながり」と「未来に対する希望・夢」の大切さだと思います。

高校を卒業し１８歳成人を迎えた皆さんこそが、これからの世界や日本を担い、支えていく存在です。夢を持ち、それを仲間で共有し、ケアしケアされ生きていく社会を築いて欲しいと願っています。

結びとなりますが、本日ご臨席賜ったご来賓並びに保護者の皆様をはじめ、学校運営連絡協議会協議委員や地域の皆様など、これまで、本校の教育活動にご協力ご支援いただきましたすべての関係者の皆様に、心から感謝申し上げます。そして、卒業生の皆さんが鷺宮高校を誇りに思い、それぞれの世界で大きく飛躍することを願って、私の式辞といたします。

令和６年３月８日

東京都立鷺宮高等学校長　土方　賢作